| 公開・非公開の別 | ■　公　開　□部分公開<br>□　非公開 |
|---|---|

# 2022年度第3回(第37期)浜松市社会教育委員会会議録

1　開　催　日　時　　2023年3月13日（月）午前10時から午前11時30分

2　開　催　場　所　　浜松市役所本館8階　第3委員会室

3　出　席　状　況　　委　員　　近藤潤子委員、澤根緑委員、白岩伸也委員、
中村朋子委員、飛田ひさ子委員、晝馬るみ委員、
松井里華委員、松本孝久委員、村上剛委員、山本巌委員
事 務 局　　嶋野文化振興担当部長、鈴木生涯学習担当課長、
中村生涯学習推進グループ長、遠部指導主事、
名波主任
欠席委員　　なし

4　傍　　聴　　者　　0人（一般：0人、記者：0人）

5　議　事　内　容　1　各種表彰について
2　生涯学習事業について
①　浜松市と大学との連携事業について
②　地域学校協働活動の充実について
3　第37期社会教育委員会「重点協議テーマ」について
4　令和5年度社会教育関係団体の補助金について

6　会議録作成者　　創造都市・文化振興課生涯学習推進グループ
遠部佳代子

7　記 録 の 方 法　　発言者の要点記録
録音の有無　　無

8　会　議　記　録

1　開会
2　議事
（1）　各種表彰について
■事務局より資料1に基づき、第75回優良公民館文部科学大臣表彰、令和4年度優良公民館等静岡県教育長表彰、令和4年度子供を育む地域活動団体県教育長表彰について報告

■高台協働センター山口朋章主任より事例発表
■意見・感想、質疑応答

（澤根緑委員）
高台協働センターが行っている学習支援事業は浜松市の子育て支援課の事業か。

（山口主任）
浜松市の子育て支援課の学習支援事業ではない。あくまでも自主的に始めた事業であるので子育て支援課の事業費はついていない。子育て支援課事業については、小学校４年生以上を対象としなければいけないため、地域と相談したところ、学年の縛りを入れたくないということで自主事業とした。

（澤根緑主任）
地域とよくつながっている。県教育長表彰を受賞された理由がよくわかるすばらしい取り組みである。地区社協との関係はどうか。

（山口主任）
地区社協の方、ＳＳＷ（スクールソーシャルワーカー）、地域のボランティア団体の方と連携している。

（飛田ひさ子委員）
改めて私の活動する「高台ワピ」もすごいことをやっているのだと感じる。「高台ワピ」を立ち上げる際は、大変苦労した。何から始めてよいのか分からなかった。前例が何もない中、協働センター職員が全面的に協力してくれて、いろいろ調べてくれた。あらゆる経験と知識を駆使して、立ち上げに尽力してくれた。単発のボランティア活動はたくさんあるし簡単にできるが、本当に地域に根づいた活動をしていこうと考えたときに、協働センター職員は異動があるため、担当者が代わったらまた一からやり直していかなければいけないのではないか、また活動の流れを止められるのではないかと心配したが、そうではなかった。立ち上げに係わってくれた担当者がちゃんとその思いや経緯を、次の担当者に伝えてくれた。そのことに私は感動した。協働センターの、そして市の職員の方たちの力を感じることができた。声を出して行政に相談に行くことが第一歩となる。本当に一生懸命寄り添ってくださるこれは浜松の財産であると考える。今、団体の活動は４年目に入るが、軌道に乗り出した。感謝申し上げる。

（晝馬るみ委員長）
活動を持続可能なものにするために、協働センターは裏方に徹するという話があったが、その立ち位置の難しさや苦労がいろいろあった思うがいかがか。

（山口主任）
ボランティアさんが主体であると口で言うのは簡単である。実際は、それぞれ仕事をされている。料理に例えると、材料を切っておく程度を協働センターが担当し、煮込んだり炒めたりするのはボランティアさんにやっていただくというイメージ。協働センター職員よりも、地域の方に子供と接してもらうことが一番大事だと考える。

（飛田ひさ子委員）
一時のボランティアならば、自分のポケットマネーを出してしまえば早い。しかし、継続して運営していくためには経費がかかる。その経費を出資してくれる団体や事業を協働センターが探して、声を掛けてくれた。日本全国くまなく探してくれた。自分たちでは到底できなかったことを、協働センターの協力で可能にしてくれた。活動を継続できるような支援があるとよい。

（澤根緑委員）

人・場所・資金の３つがそろって実現したすばらしい事例である。協働センターに頼ることができると分かった。
（山本巌委員）
行政主導ではなく、ボランティアが主体で活動を進められるというのは、一番目指すところである。協働センターの地域には３つの小学校があるが、その内訳はどうか。また地域への活動のひろがりはどうか。
（山口主任）
高台協働センターは管轄している範囲が広く、それぞれのイベントや活動場所により、来る子供たちの小学校の比率は変わる。地域への活動の広がりとしては、地域の企業の協力も得られるようになってきた。
（晝馬るみ委員長）
協働センターに子供たちが集まてくるということだが、歩いて行ける範囲に協働センターがない場合がある。講座やイベントの募集はどうしているか。
（山口主任）
生涯学習の講座については、基本的に保護者の送迎で来てくれるため、３つの小学校の差はあまりない。しかし、長期休暇の居場所としての利用は、協働センターに一番近い泉小学校の子供たちがほとんどである。萩丘小学校の近くには、子供たちの居場所として「高台ワピ」があり、「高台ワピ」も利用している。城北小学校区でも居場所づくりについて検討を始めている。小学校ごとに特色もあるので、基本的には小学校単位で居場所づくりを考えていくことが理想である。地域の声としても自分の地域の小学校の子供たちをまずはしっかり見守りたいという思いがある。
（晝馬るみ委員長）
地域からの要望に応じたイベントをされていることがよい。すばらしい発表を聞いて、自分の地域でもこういうことができたらいいなと希望が膨らんだ。協働センターの職員の方々の力を借りながら活動を進めていけるとよい。

(2)　生涯学習事業について
①浜松市と大学の連携事業について
■事務局より浜松市と大学の連携事業について報告
■事務局より地域学校協働活動の充実について報告
■意見・感想、質疑応答
（村上剛委員）
意見交流会で学生に聞いたところ開催する講座のテーマやその内容について、市から特に方向性を示すことはなく、何でもいいとのことであった。市内に６大学あり、それぞれ特色があるので、この大学であればこんな講座ができるのではないかということをある程度把握しているのであれば、その年その年で単発の講座を開催するのではなく、つながりをもった講座が展開できるのではないか。難しいことではあるが、そうすることで実績が蓄積され、また新しい展開が考えられるし、この大学はこんな講座をしてくれるということが、イメージしやすくなるのではないか。
（事務局）
浜松市と大学との連携事業では、大学の授業の一環としてカリキュラムにも一部取り入れられ、全国でも注目される取り組みとなっている。学生が大学で今、学ん

でいることを講座として開催してもらっている。こちら側からの要望ではなく、あくまで大学の思いを尊重している。大学の授業のカリキュラムの中でやれる範囲で、さらに講座の開催希望があったものの中でお願いしているため、なかなか統一したテーマや内容を示すことは難しい。

この大学にこんな講座をやってほしいという希望は、協働センターや市民からもあるのは事実であり、アンケート結果等を大学にも共有している。

（村上剛委員）

大学によって温度差がある。発表の中で、実際の講義で学んだ内容が講座とどうつながっているのかという説明がもっとあるとよい。

（事務局）

各講座について、講座の意図や成果などは、報告書において詳細にまとめている。皆さんにお配りすることで、詳細な内容はご紹介させていただくという形になっている。今回３年ぶりに対面ででき、さらには意見交流会自体も大学連携事業が始まって 12 年目で初めての試みであった。大学の皆さんと一緒に交流して、お互いの意見を交換できる機会を初めて持つことができた。今までは、一方通行の報告にとどまっていたので、今回の新たな試みの中で、委員からもご意見いただいたことも踏まえ、各大学に伝えていく。今回、それぞれの大学の様子がお互いにわかったと思うので、それを踏まえて、今後それぞれの大学が講座をより良くしていくために考え、市も一緒になって連携して取り組んでいきたい。

（白岩伸也委員）

今年度は参加できなかったが、昨年度参加させていただいた時に、学生たちが普段大学で見せる姿とは全然違う様子が見られた。こんなにちゃんと自分たちの考えや思いを伝えられることにすごく驚いた。同時に、この講座や報告会というものは、大学にいるだけの自分では学生たちに届けられない部分がるのだと感じた。大学のカリキュラムともっとうまくつながるシステムがあればいいなと思うし、おそらく大学側もそのために努力しなければいけないと感じた。

（畫間るみ委員）

今年度新たな取り組みの意見交流会では、聞くだけではなく、双方向の学びというものを確認することができたと思う。

（中村朋子委員）

意見交流会では、実際に講座を開催してくれた大学生の講座開催に向けての熱意や思いを直に聞くことができた。大学生たちは、他大学の発表を直に聞くことで、発表の仕方も学ぶことができ、次につなげていくことができると思う。また協働センター職員の話も聞くことができ、様々な立場の方と交流ができたことは、一堂に会して開催することの最大のメリットである。今回、一堂に会しての成果報告会を開催していただき、よかった。

（松井里華委員）

学生の皆さんが、忙しい中で実際に講座開催をして、報告会のためにたくさん準備してくださったこと、ただただ感動した。娘と同年代の方があんなに大勢の人の前でちゃんと発表できることにも感動した。他大学の学生たちが、一堂に会して集まる機会はあまりないと思うので、とても貴重な機会であったと思う。来年度以降も毎年このような形で開催していけるとよい。自分の興味のある講座があっても、実際には自分の住む地域で開催される講座しか知ることができない。全市の皆さんに情報が届くようになるとよい。今回の成果報告会ももっと多くの方に知っていただき、講座を体験していただける場があるとよい。

（晝馬るみ委員長）
大学の連携事業に限らず、協働センターで様々な講座が開かれているが、なかなか地域の皆さんに届かないということは、この社会教育委員会でも毎回話題になるところではある。二次元コードを読み取って情報が入手できたり、簡単に申し込みができたりするようになってきて、一歩一歩進んでいる。
（近藤潤子委員）
今回対面で実際に大学生の話を聞けたことがよかった。意見交流会は今年度初めてであったが、職員や大学生とは話ができてよかった。その中で印象に残ったのは、大学生の「活動ができたことに喜びを感じた。これからの就職活動に向けても自信が持てた。」という言葉である。大学生にとっても受講者にとっても、意義のある活動である。小学生の孫がいるが、学校からチラシを持ち帰り、すぐに参加したいと言った。そのチラシは小学校１年生にもわかるように漢字にはふり仮名がふられ、色のついた紙に印刷がされていた。また、講座もとても分かりやすく、すばらしい講座であった。学校からの周知であれば、チラシの配付やさくら連絡網の利用が考えられる。さくら連絡網を地域の情報発信にも活用させてもらうのはどうか。意見交流会では、プログラミングの講座を開催した学生が、プログラミングについてもっと知ってもらえるようなチラシを工夫したいと意欲をみせていた。
（松本孝久委員）
大学生が子供たちのために何ができるのかを一生懸命考えている。市内の小中学校では、コミュニティ・スクールが導入されている。来年度クラブ活動に地域の方に講師として来ていただくが、大学生にも来ていただけるとありがたい。地域のニーズを受け入れてくれる窓口があるとありがたい。学校としては、大学生が来てくれるだけでありがたい。大学生とふれあうことは、子供たちにとってすごく貴重な体験となる。
（事務局）
何とか学校で開催できるようにしたいと考えている。子供たちが大学生を憧れの目で見て、すばらしいキャリア教育となるのもよく理解しているが、大学生には授業がある。今年度、学校に入ることができた講座は、大学生が夏休みの期間や授業がない日時に、何とかお願いをして入れていただいたものである。小学校の授業をしている時間は、大学生にも授業がある。この難しさを感じながら、でも少しでも多くの講座を学校で開催できるように考えていきたい。大学には来年度の講座開催希望を確認していくが、学校での開催も検討していただけるように、記入例にも学校での開催を想定したものを示し、何曜日のこの時間であれば可能であるという記入をしていただけるように準備をしているところである。
（山本巌委員）
地域学校協働活動ボランティア講座と大学との連携事業を絡めていくことはどうか。
（事務局）
浜松市と大学との連携事業に絡めることは難しい。全般的に大学生と協働センターのつながりがなかなかないのも現状であり、課題である。地域学校協働活動ボランティア講座について大学にも周知をし、参加を促していきたい。
（山本巌委員）
意見交流会の中で、学生と教官のかかわりについて聞いたが、大学によってずいぶん差があることを感じた。大学生の知識、行動力やトーク力は財産だと思う。使わない手はない。同時に大学生にとっても、講座を開催したり成果報告会で発表し

たりする経験は大切なことである。小学生、障がいのある方、様々な年代の方と接することは、社会に出たときに求められる人間関係力を養える場となり、大学生にとってとても貴重な機会となる。

（晝間委員）

今回生涯のある方も参加できるボッチャの講座あって、体験交流会ではその講座を開催した浜松学院大学の学生の話を聞いた。その学生は、4月から特別支援学校の教壇に立つことが決まっていた。その学生が「今回、西部特別支援学校の生徒さんが参加してくれたことで、実践に結びついたし、これから自分が教師として教壇に立つ心構えを学ぶことができた。」と話してくれたのが印象的であった。これからも障がいのある子供さんたちも参加できるイベントや講座も増えていくとよい。大学生にとっても受講者にとっても大変有意義なこの浜松市と大学との連携事業を、今後も継続していっていただけるといいと考える。

（村上剛委員）

もう少し意見交流会の時間をたくさんとっていただけるとありがたい。また、司会者や書記を決めておくとよい。

(3)　第37期社会教育委員会「重点協議テーマ」について

■事務局より説明

■意見・感想、質疑応答

（澤根緑委員）

新津小・新津中学校の学校運営協議会の委員をしている。学校運営協議会では、学校のグランドデザインを説明してもらった。社会教育委員として、地域住民の一人として、何か学校のためになることをしたいと考えている。地域に住んでいる大学生に声を掛ける等して、地域の力になってもらえるようにしていきたい。学校と一緒になって、子供たちを見守っていきたい。

（松本孝久委員）

文科省の方から出されている学習指導要領の理念が「よりよい学校教育を通して、よりよい社会をつくる」とある。よりよい社会をつくることが、学校教育の大きな責任である。社会をつくる子供っていうのは、学校だけでは無理である。家庭、地域、社会が一緒になって子供をどう育てるかということで、コミュニティ・スクールが誕生し、そのコミュニティ・スクールの中で、地域の方の意見を聞きながら学校運営を行っていくっていうのが、

今のやり方である。そんな時にいろいろ相談したり、何か力になってもらえたりすることができる社会教育の力は、とても重要であると考える。

（山本巌委員）

重点テーマそのものはよく理解した。学校支援コーディネーターの役割は、コミュニティ・スクールにおいて非常に重要である。地域学校協働活動ボランティア講座の開催において、学校支援コーディネーターや学校側から、協働センターに提案をすることがあってもよいと考える。

（事務局）

この活動というのが、運営協議会であるとか学校支援コーディネーターを巻き込

んで、推進していくように考えている。まだまだ、動かし始めたような状況であり、学校運営協議会とか、学校支援コーディネーターを所管している教育委員会との連携を深めていく中で、教育委員会とも協働で推進する意識を高めていくということになってくると、学校から協働センターに提案していくという流れもできる。まずはこの地域学校協働活動ボランティア講座を何度か開催していく中で、認知度や認識を高めていくことが、来年度以降しばらく必要であると考える。学校支援コーディネーターとのつながり、人的な関係も深まりつつあるので、数年後にはもう少し充実した実施フローが築けることを視野に入れて活動していく。

（松本孝久委員）

学校運営協議会には、協働センター職員がオブザーバーとして参加してくれているケースが多い。そのなかで何かあったらご意見をいただいている。学校運営協議会の中で地域学校協働活動にもふれる機会もある。

(4)　令和５年度社会教育団体の補助金について

■事務局よりプレゼン資料に基づき、社会教育団体の補助金について説明

■意見、質疑応答なし

（畫馬委員長）

社会教育団体への交付補助金について承認させていただく。

3　連絡事項

■事務局から以下の内容について連絡

・配布物について説明

（ココロとことば、社教連会報 No.92 浜松市と大学との連携事業報告書追加分

・次回開催予定

令和５年６月予定

4　退任委員挨拶

白岩委員より挨拶

5　閉会